

ありふれ無い時間溯行  
者は世界最強

ルナ=テンペスト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とにかく駄文なのでみたい人だけみてください  
タイトル変えました

# 目次

始まりの始まり

プロローグ

1

うん、デスゲームに異世界召還とかラ

ノベかよ！（1）

5

うん、デスゲームに異世界召還とかラ

ノベかよ！（2）

9

ステータス紹介

13

許されないことだとしても、それは

20

それは、希望だから

25

だから、だから失くすわけには

いかないんだ！！！！

31



# 始まりの始まり

## プロローグ

アイングラッドにて

「リンクスタートしてから二年かゝ、」

「ライト、それは言うな、絶望する。」

何がとは言わない物の、何となく察する

「言うなよ、零」

「事実を述べただけだけど」

「なあクロ、何かある……の……か」

さつきから何も喋らないクロにライトが問いかけようとしてその表情を見て、固まった、その視たことのない顔をしていたのだ、ひどい怒りを押さえてるかのような顔をしていた。

「ハハ、何てこつた、まさか、死んだのか？」

予定どうりではあるが、キリトたちのことはまだ切り離せないか。

「どう言うことだ？」

『11月7日14時50分ゲームはクリアされました

ゲームはクリアされました』

「キリト、クリアおめでとう。そしてありがとう。」

零はその言葉で、何か察したようだが、ライトは気づいていないようだ。

そこに、ナミと白がやってきた

「このゲームもようやく終わるのね、」

「みんな現実に戻ったらあっちで合おう。」

「そうだな、ナミ、ライト、零、白、本名教えてくれないか？」

「良いわよ、私は八重樫雫よ」

「ライトは？」

「俺は天之川光輝だ。」

「零は？」

「僕は南雲ハジメ」

「白は？」

「私は白崎香織」

「最後に、俺は黒江遊、今度は、あっちで合おう！」

「ああ」「分かったわ」「うん」

その後病院にて

「知らない天井だ。」

そやそうかと一人つぶやき、起き上がる、ナーヴギアをとって立ち上がり、これからのことを考えながら歩き出す、目標は白崎か八重樫か天之川か南雲、この四人の誰かに会うことか。

今まではソードアート・オンラインの世界と繋がることはなかった、二、三回目の大きなイレギュラーだ。今から知らないことが起こる、確実に、エヒトルジュエが仕掛けて来る、来るとしたらUMが終わった頃か、まあ二年程間がある、まだ考えなくていい。例外が多いがいいか。

さて、物語の続きを始めよう

時はたち

ぱあああああと太陽の光を連想させるようなオレンジ色の光が病室を満たした。

「さてこれで良いかな、きつと大丈夫だ。未来は変えられる。」

病室を出る姿をついさつきログアウトしたユウキに見られてしまい、声をかけられてしまった。

「待って、体が病気にかかる前みたいなのは君のおかげ？」

「・・・」

無言で部屋を出ようとする手を捕まれてさらに質問された。

「なぜ、助けたの？、あなたは、だれ？」

扉を閉め、振り向き答える

「・・・はあ、そうだよ、助けたのはアスナ達が悲しむから、ALOでのユーザーネームはクロ、本名は答えることはできない。」

「！」

「この事は秘密にしてくれないかな？」

「分かった、ありがと。」

ユウキはそれだけ言うとう手を離れた、黒江は病室から空間魔法で自室に戻った。

「はあ、今のところキリト達や南雲にすら秘密だったんだけどなあ。まあいつか。」

黒江は後悔しながらその日は眠りについた。



うん、デスゲームに異世界召還とかラノベかよ！（1）

7日間の内5日ある学校の始まりで2日間しかない休みの終わりである月曜日に少しだけ憂鬱になりながら教室の戸を開く、俺ではなくて一緒に登校したハジメに對してだが、嫉妬の視線が向けられた、原作と違っていいなあとか変わってくれという感じが男子から、女子からは特にない理由はわりとかなりの頻度で開催される女子会で香織から理由を聞いているからである。まあ日常のことなので、ハジメも俺も何も気にせず席についている。

不意に後ろの席から声が掛けられた

「なあ、悠あのゲームのテストプレイは俺にやらせてくれないか」

「ああ、何で口外していかないその情報を知ってるかわからんけど推薦はしといてやるよ。」

「ええと、それは」

「どうせ香織から聞き付けてきたんだろ」

ハジメ自身はききずいていないようだが香織にストーキングされている、ちなみにこれはクラスの共通認識である。

生活ルーティンから巡回サイトまで知っている香織はたまにだがハジメが制作を手伝っているゲームや漫画の情報を売っているのだが、こちらもハジメはきずいていない。まあ、特に問題もないので誰もハジメには言うことがないのでハジメは永遠にきずかないだろう。

南雲関連の情報ならアルゴ以上に情報を持つてると思う。

「ところで、アンダーワールドまでの道筋は見つかったか？」

「まだだ。そう簡単に見つかるわけ無いだろ、探しはじめて1日しかたつてないんだぞ」「そうか。」

「まあ、あと数日で見つけてやるよ。」

「具体的には何日だ？」

「最大で1週間かなあ。」

「分かった、約束だぞ」

「りょーかいです。」

キリトの依頼でアンダーワールドにログインするためには回線を見つける必要があるからなあ、国のサーバーをハッキングでもするか。

「なんかよくないことを考えてるなコイツ」

はて何のことやら、絶対にばれるようなやり方はしないぞ

昼休みになり

「雫さんや、雫さんはこのネタをどう思う？」

雫と席が隣の俺は鞆から董さんから雫に意見を聞いてと言われていたモノである原稿を取り出した。

ちなみに、雫は董さんの少女漫画のファンなのである。

「これは何かしら？」

「このネタの意見を聞かせてとのことと、コピーしてあるからもらってもよいそうです、意見は今日か明日、家に来て直接教えてねと言っていました。」

「なら明日の帰りによらせてもらおうね。」

会話からもわかるように俺はハジメの家に居候させてもらっている、簡単に理由を説明すると、家が火事で全焼して親はその時に死んだ、俺はS A O事件に巻き込まれていとおかげで助かった。

ちなみに、俺がこんな会話をしているのはハジメは香織に関わってクラスから小さいとはいえ敵意を向けられないために休み時間になるとすぐに睡眠モードに入るのが理由だったりする。

まあ、俺はこの日常に満足していた、が、それは今日崩れ去ることとなった、異世界に召還されるという不幸とも幸福とも取れる出来事によって。

8 うん、デスゲームに異世界召還とかラノベかよ！（1）

（すいません、董さんのネタはかなり延期になりそうです）

うん、デスゲームに異世界召還とかラノベかよ！（2）

——黒江遊 トータス——

どこかの、大きな広場にて30人程の学生が倒れていた、が、どうやら、一人起きたようだ。

「……は？」

ツツツツ、この魔力の残滓！たどれるか？いや、無理か毎回のことだからいいが、今倒せたらどれ程いいことか

「どつちにしろ、結果は同じか。」

俺が起こさなくても、誰かが起きて皆を起こす。

そう割り切り、隣にいた雫に寄って、ほつぺたを何回かつつく。この時に写真を撮っていたのは秘密である。

数秒たって、艶かしい声を出しながら雫が起きたようで、周りを見渡している。

「雫は皆を起こしといってくれるかな、俺は……ちよつと周りを見てくるよ。」

悠の声を聞きようやく頭が回り出した雫は、香織は南雲君のためにも最後に起こそうと考えながら最初に近くにいたキリトとアスナを起こし、周りの人を起こすよう言う

他の人をを起こしていく。

一分程で全員起きたようで、今度は皆が混乱しているのを押さえようだ。

悠は押さえ終わつたのを見計らつて広場の中に入る、雫からジト目を喰らうが気にしない。

雫意外にも、数人だけ俺が広場の中に入って来たのを驚かなかつたが。

「皆、ここはトータスと言つてファンタジーな世界らしい、んで、魔人族とやらと戦争中で、負けるから勇者を召還してんだとき、これは近くにいた騎士さんの四肢の骨を折つて聞いた話だから嘘は無いと思うよ。」

騎士さんのことはもちろん、嘘である、何百回と聞いてきた説明だ間違えようがない。

ハジメは意味を悟つたのか、聞いてきた。

「負けるから、召還したつて事は、僕達に戦争を…人殺しをしろつてことだよね。」

「さすが、ゲームクリエイターの息子、その通りだ、まあテンプレ通り俺達に帰る手段はないから、作るか、この世界で冒険者でもしながら生きていくしか無いけど、俺は前者をオススメするよ、ま、残念なことだが、この世界の奴らは、一神教でヤバイ奴らもいるから信用ならないけど、戦うための手段を覚えなきゃならないから、しばらくは従うしか無いけどね。」

そう現実とゲームでは感覚が違う、血の匂いや敵を切る感覚、そして殺したという罪

悪感。

SAOでのことを思い出して泣き叫ぶ者、崩れ落ちる者が出てくる中。

振り向き、扉の影に隠れる者達に對し言う。

「まあ、こうなるか。それより……………出てこいよ、騎士様方、いるのはわかってる、出てこないなら——」

言いきる前に扉から人が一人だけ出てきた、

「ごめんなさいね、様子を見て出ていこうと思ったのだけど、タイミングを忘れて。」

「名乗れ。」

圧力と魔力を込めて言う、言霊と言うやつだ神言も使えるが今回は使わない、どうせ、意味はないからな。

「……………私は、教皇直属近衛騎士団筆頭騎士にして、聖騎士団長、坂口ヒナタよ、教皇に代わり歓迎するわね。」

この世界もうだめだ、SAOに加えて点すら混じってるどうせ、東方

「ところで、貴方は、魔力を操れる用だけど、どうしてかしら。」

「やつぱり、そうなるか、……………、こことはまた異なる異世界に召喚されたことがあるんだよ、戻るための魔法がミスって意志だけしか戻れなくて事故りそうになってたこの体に無理やり憑依して守ってな、そのお礼としてこの体に憑依し続けて良いと言われたか

ら、なぜか魔法も使えた、それだけだが、何か、……それより、こここの人間じゃないよな、何より、この世界に〈刀〉はないはずだからな。」

「そうよ、あなた方とおそらく同じ世界から召還されたわ、忠告よ、この世界は、いえ、トータスは、歪よ。」

話に時間がかかったわね、部下から不信がられるから、ついてきてくれないかしら。」

「嘘は感じられない、ついてつていいと思う。て言うかついてこい」  
「そう言ってもらえると助かるわ。」

ちなみに外の奴ら対策として魔法で声を聞こえないようにする結界を張つてあるがヒナタは気がついていたようだ、となるとやつぱり、実力はオスカーたちの半分くらいか、わりと強いな、是非味方に付けたいものだ



## ステータス紹介

あの後、部屋を振り分けられてその日は終わった。そして今、訓練場までに集められている。考えていることが多すぎて昨日寝れなかったので寝ていいですかね

「さてまずは、協力を感謝する、勇者御一行。

俺はメルド・ロギンス、ハイリヒ王国騎士団長だ、とりあえず、今渡された物はステータスプレートと言ってその名の通りの物で身分証明書にもなる。失くすなよ？、で、一緒に渡された針で血をたらせ、それで所有者が登録される、原理とかは聞くなよ、知ら無いからな。

でそれに表示される天職は才能だ、技能は取得している能力、それでトータスの平均初期ステータスは10だ、まあお前らはだいたい数倍から数十倍はあるだろうな。」

寝むいなあ、まあ、数百回目の所有者登録だしなんとなく予想はつくけど

神威かみい 弧月こづき 17歳 男 レベル1

天職：超越者、廻る者

筋力：操作可能

体力：操作可能

耐性：操作可能

敏捷：操作可能

魔力：操作可能

魔耐：操作可能

技能：全属性耐性、状態異常耐性、物理攻撃耐性、追憶〔＋記憶再現〕〔＋原理解明〕  
〔＋絶対記憶〕〔＋記憶顕現〕〔＋共有〕〔＋記憶消去〕、霸潰、真匠、能力作成、ソードスキル

予想を大いにはずされた、前は操作可能になってなかったから、まあただ使いやすくていいけどな。

横にいるハジメはこんな感じ

南雲ハジメ 17歳 男 レベル1 人間

天職：神殺者、錬成師、エグゼイド

筋力：50000

体力：50000

耐性：500000

敏捷：500000

魔力：500000

魔耐：500000

技能：錬成〔＋鈇物系鑑定〕〔＋精密錬成〕〔＋鈇物系探查〕〔＋鈇物分離・融合〕〔＋複製錬成〕〔＋圧縮錬成〕〔＋想像構成〕、魔力操作〔＋魔力放射〕〔＋魔力圧縮〕〔＋遠隔操作〕、胃酸強化、纏雷、天歩〔＋空力〕〔＋縮地〕〔＋豪脚〕〔＋瞬光〕、風爪、夜目、銃技、気配察知〔＋特定感知〕、魔力感知〔＋特定感知〕、熱源感知〔特定感知〕、気配遮断〔＋幻踏〕、状態異常耐性、全属性耐性、先読、金剛、豪腕、威圧、念話、追跡、高速魔力回復、魔力変換〔＋体力〕〔＋治癒力〕、限界突破〔＋霸潰〕〔＋真匠〕、概念魔法、言語理解、ソードスキル

エグゼイド、究極の救済を意味するエクストリームエイドの約。言い得て妙だな、つて  
 いうか、ステータスが今まで世界と違うからこれからどうするか。それより、この職業  
 はヤバいな、唯一神エヒトが思うがままに、つて感じの奴に見られたら即死刑だろう  
 なあ、これ。

「後ろにいるのは、悠君かな？」

「正解。黒江さんです。ステータス、《隠蔽》しようか？」（無意識で技能を使うかよ、）  
 《隠蔽》これは2、3周目に《能力作成》で作ったモノである。

効果は対象を隠蔽、認識を阻害し、見えなくしたり、違うものに見える様にする。しかも使用者にしか解除ができない上に世界レベルで記憶の中からも隠蔽されるため、隠蔽前をみてもそれが《隠蔽》されてるとるときはずけない。ステータスプレートの様な物に掛けたときは所有者が結果に影響を与えることがある。

簡単に言うと、何でも半永久的に遠藤化、認識変化できる

「お願いします。」

「OK、じゃ、《隠蔽》」

隠蔽後

天職：錬成師

筋力：70

体力：80

耐性：60

俊敏：80

魔力：90

魔耐：90

技能：錬成、生成魔法、ソードスキル、言語理解

俺もやんなきゃな、自分になら隠蔽じゃなくてこつちの方が効果があるか

「《超越者権限・職業変更》《超越者権限・技能変更》《超越者権限・ステータス操作》」

天職：廻る者

筋力：96

体力：96

耐性：96

俊敏：96

魔力：96

魔耐：96

技能：追憶、ソードスキル

キリトはどんな感じかな、見てみよう

桐ヶ谷和人 17歳 男 レベル1 人間

職業：黒の剣士、星王

筋力：16500

体力：16500

耐性：13050

俊敏：9999999999

魔力：19670

魔耐：15030

技能：ソードスキル《+アバターモード》《+十二刀流》《+神聖術》《+記憶完全支配術》

《+心意》《+システム外スキル》《+オリジナルソードスキル》言語理解

キリトのステータスバグってるなあ、バグじゃないけど、それはいいとして、ステータス隠蔽し、別にいらぬ言ええば《意志の力》とやらでなんとかなるだろ

「バグってるな、ステータス」

「現実逃避させてくれ」

「いやだ、それより勇者より他の奴らが強いのは問題だからその《意志の力》とやらでステータス改変しとけよ。」

んじやまた」

結界を言えばできたらしい、こんな感じになった

転職：双剣士

筋力：100

体力：100

耐性：50

俊敏：900

魔力：135

魔耐：150

技能：ソードスキル、言語理解

さて、とりあえずメルド団長に報告するか。

その後、全員がメルド団長に報告するまで待つて、宝物庫で武器を選んだ。ちなみに記憶召還で出せば問題無い俺は選ばなかった別に徒手格闘もできるから問題ないし、皆が落ち着くのや考え事のために一週間後訓練を開始するらしいということ聞いて俺は部屋に戻りベッドにつくや否やすぐに眠りに落ちたのだった。

許されないことだとしても、それは——

「さて、まずは、《超越者権限・職業変更・種族変更・機巧種<sup>エクスマキナ</sup>》  
技能<sup>スキル</sup>に変化は特にないが《模倣》というモノが増えている、よし、これで今の戦闘能力  
の最高値以上を叩き出せる。

「次に、《能力作成・周辺環境適応技能進化作成プログラム》」

おっと、技能の作成・進化が早いな、っていうか頭いてえ、何だ、この情報は魔道具  
の使い方と効果それにプラスして応用方まで、空気中の全てや色の一ミリ単位での違  
い、音で部屋の中にある物の全ての形を認識、人がいたら鼓動や血流の極々最小の音を  
して読心術に、皮膚が空気の動きで部屋の全ての形を認識する五感の強化プラス自分ス  
テータスが右端に写っている、機巧種<sup>エクスマキナ</sup>じゃなかったら情報の多さで脳の情報処理が間  
にあわない、痛みが脳を埋めつくし気絶、起きたとしても繰り返すそれに精神が異常を  
きたし、最終的に死亡するのが良い方だ。

「ハハハ、」

死亡するのが良い方だと言う自分の事を他人事のように考える機巧種<sup>エクスマキナ</sup>の思考に思わず  
笑いがこぼれる。まあ、結論から言ってその通り死亡するのが良い方だ、痛み↓気絶↓



痛み↓起きる↓痛み↓気絶で無限と錯覚できるような痛みにも精神の異常が起こらない程だ、それも錯覚であつて実際は一時間もかからず死亡しているのだが。そして毎回のことだが知つてはいてもやはり機巧種の演算、予測の速度、正確さは正気じゃない、ただ、五分もすればさすがになれた。

「まだできないか、《無限アンリミテッドの剣ソード製》の展開や《乖離剣エア》、《約束エックされた勝利カリの剣パー》の召喚、《天撃》や《血界》に《氷花》、《星剣》の召喚、《領域展開》e t c. 何が原因だ、」  
 できるか、南雲のステータスが異常に高かつたり、今までになかつた、ゲームの中とは言え実戦と言つて差し支えないSAOやALOでの経験、キリト達がいることでの変化。南雲の奈落に落ちたよ事件は必須事項でやればできないことはないがどうしても悪い立場になつてしまう。

まあいいか、スマホ+オーディナルスケール等その他諸々は………使えるな、連絡もできる。とりあえずはユージオ、アリスを呼んで、あのことを伝えないとな、キリアスに連絡するか。

「オーディナルスケール、起動。」

いや、全員に言いたいたことがあるからな、集合の連絡を全員(半分モブな人以外)に送つてと。

数分後

これで全員か、

「よし、急に呼び出して悪かったな、とりあえず、空間と転移ぶから、準備して。」

「え、どこへ」

「さっさとしろ」

「ああ、めんどいから、この部屋ごと転移しちやおう。じゃあ準備は良いね」「えっ、ちよっ、待つ」待ちません、《天在》。」

視界が白く染まって、次に見えたのは俺達がいた王宮の一室ではなく、ヒュドラの出てくるオルクス大迷宮の最終ボスの部屋だった。まあ、敵が出てくるならやることは一つである。

「南雲、キリト、アスナ、ユウキ、ユージオ、アリス、光輝、雫、香織、手伝え、武器はちゃんと用意してあるから大丈夫だ南雲にはドンナー・シユラーク（＋その他諸々の入った宝物庫）を、光輝には聖剣、雫にはこの黒刀（原作最終決戦時の物）を、香織には……使徒さんボディと大剣かな、キリト達にはオーディナルスケールにアンダーワールドで戦った時の姿になれる機能を追加しておいたステータスはびったり同じになるようにしてある。香織は魂魄を移してと。やりますか」

「待って、香織が動かないのだけど、」

「香織はそっちじゃなくて、使徒さんボディに意識を移したから、戦い方は体の方が覚え

ている。安心しろ、とりあえず、使徒さんボデイは核爆でも傷一つつかない位には強化したから、あいつにそんな攻撃はできないしね。」

「分かったわ。とりあえず後で、しつかりと話を聞くから覚悟しときなさい」

こんな会話してる間にヒュドラは出てきたようだ。

「じゃあ、作戦ないから、オフレコでやるぞつと、」

そう言いながら、防御、回復の役割を持つ奴らを切り落とす・・・つもりだったがみじん切りになっていた。

「あれ、やり過ぎた、まあ良いか、後はお前達でもクリアできるだろ、がんばろ」

結果から言えば最後の首が出てくるまではよかった、あれは勝てそうもなかったのが俺がやった。

「ほい、終わりつと。隠れ家には行けるが行かない、とりあえずもつかい《天在》つと」

また視界が白く染まって、ユエさんのいる場所が見えた。

「とりあえず、南雲、助けてこい。(・▽・)」

「ええつ、無理だよ、あれは封印石で「良いからやれ」だから無「やれ」ハイ」

無言の圧力を受けた南雲は泣く泣く助けにいったのだった。

そんで持つて例のサソリさんは出てきた瞬間に中身だけ《否定》した、簡単に言うとなりの鉱石だけ残った状態になった。

「で、とりあえず服と魔力回復薬な、それと記憶違いというか、思い込みの捏造というか、本当の記憶はこつちね。」

そう言つて、ユエさんの頭に記憶を飛ばす（わざわざ五十回目の時に過去に戻つて見てきたやつ）、ちなみに南雲以外の男は目を潰してある、自分含めて。で、ユエさんが服を着たのを気配で感じとつて、回復魔術を使う。

さて、

「——キリト、南雲、気づいてるな」

「ああ」

「うん」

「「後ろで隠れてる奴ら、出てこいよ」」

## ——それは、希望だから

「「後ろで隠れてるやつら、出てこいよ」」

「えっ、ばれたけど。どうする？ 渚君」

「とりあえず出よう。敵対はしない、特がないからね、あのサソリを倒せるような人には勝てないから、OK?」

「分かった、」

（待つのめんどいから回り込もうかな?）

「とりあえず、一つ質問、アレーティア姫をどうするつもりですか?」

「俺は特に用はないぞつと、危ないね〜急に。」

「ちよつ、業君!!」

「わあー、すごいね、秒速十メートル位なのに、避けるんじやなくて逆に前に出るなんて、それと、跳ね返してるのも、動かなければ足下数センチにびったり床に刺さるように計算もしてある。そして、いつ後に回ったの?」

「自分じゃなくてまた別の人格が行ったことだから知らん、さて、とりあえず選択は二つ、俺の要求を飲むか、死ぬかだ。どっちを選ぶ? 前者を選ぶなら譲歩がある程度しよ

う。」

「何言つてんの、前者以外あり得ないって、それで条件は？」

「とりあえず今回のことは……いや、とりあえずついてこい、自分達で見て、それで自分達で判断しろ、OK?」

「分かった、それでいいよ、で名前は？わりと長い付き合いになりそうだから知っておいて損はないよね、僕は業、赤羽業、で、そっちの男の娘が潮田渚ね、よろしく。」

「業くんツツ、三百年前にも僕を紹介する時はいつもそれだったけどツツ、やめてつて言つたよね！男の娘つて言うの！」

「あー、うんそういえばそうだね、まあけど僕はうんつて言つてないんだよねそれ。」

「あつ、む~~~~~~~~」

「話進めていいか、」

「あ、うんいいよ」

「じゃあとりあえず、俺は黒江遊ね、よろしく。」

各自自己紹介しとけと言外に言いながら自己紹介する。

「で、話変わるけど南雲、上に注意しろよ」

「え、何？」

「だから、危ないよ、そこ」

そう言つてあるモノを天井にぶん投げる、ぴったりと窪みにはまるようにして。

音速で投げられたのにカチツ、とだけ音をならしてはまった

あるモノに反応して、天井と床と壁が変わつて白く染まったこの場所に、みんな驚いているようだ。

だがそれより前に南雲のことを心配したらどうだ？と思うなんてつたつて、南雲は現在進行形で上から落ちてきた鉱物にもろに潰されそうになっているのだから。

「南雲頑張つてね〜」

「ちよつ、黒江君ツ!?助け——」

「NOだ」

あつ、潰された。だがいいか、助けなくても大丈夫だし。

一分ほど

「《錬成》!!!」

「やつとか、とりあえずその鉱物はしまつてと。本題に入ろう。」

宝物庫で何もなかったかのように鉱石を回収して、話を続ける。

「本題つて何かな?とりあえず謝罪もないのは何でかな?黒江君?」

「まあとりあえず、アレーティア、めんどいからティアでいいか、ティアにはわかるよね、」

「ん、あなた、よく正気で、いった。」

「正気じゃないぞ。それこそ狂気の沙汰だ、一周回って落ち着いた感じだな、で言うより見てもらった方が早いかな、《心体補正》じゃ、その黒いのにさわってくれ、」

《心体補正》：わりとその名とうりのものである、効果はチート級

「……………ダメ、ティオがいても足りない。誰か発狂する。」

「大丈夫、できないようにしたから、」

「……………拷問？」

「その返答は心外だな。」

（「いいけど、キリトとアスナは問題ないぞ、精神年齢219歳と217歳だし。」

「それなら、半分だけ。」 小声

「ま、いいか、キリト、アスナ、それにさわってくれ。」

「会話を聞く限り安全性皆無のような気がするんだが、大丈夫か？」

「多分、大丈夫じゃないかな、試したことないからわからん、ユ———ティオが大丈夫なんだしいんじゃない？」

「またしつかりとしない返答が。」

そういいながら、結局さわる二人、直後悲鳴が上がった

「ガハッ」



「マジか、ヤバすぎナウ、じゃねえなうん、ふぎけんのはやめるか、——わりと予想ど  
うりだな。全記憶の半分だけでこれだもんなあ、まあ感情や感覚の全てが入ってくるな  
ら、普通か。」

「——普通か、じゃない、これで廃人になってないの、おかしい。死の恐怖や、定規を  
逸した激痛。いつ壊れても、おかしくない。」

「言つたら、一周回って落ち着いたって。もうずっと昔から壊れてる。」

そう、壊れているのだ、最初はただ現実で南雲ハーレムが見たいとかその位だったけ  
ど、選択を間違えて間違えて間違えて、ストーリーがおかしくなって、直そうと、元  
戻そうとしてできなくて、負けず嫌いでバカな俺は、なんか悔しくて、ただ、それだけ  
で何千回何万回も繰り返す、愚かにも廻り続けるのだから壊れてるのだろう、ただ自分  
はそれでいいと思う。トライ&エラー、ダメで元々、できればやったー、ダメなら改良  
する。俺は本来寿命はとっくに過ぎてるし、一時期感情がなくなつたこともあった。直  
せないのならさらに壊せ、結果が全てとは言うが結果が分からないのなら問題ない、予  
測で道をふさがない。1でダメなら2で、それでダメならさらに増やしていく、増やし  
て増やして増やして、それでもダメならマイナスにしていこうじゃないか。諦めないの  
は大切だ、ただ、それでも諦めないのが不正解の時もある。それがわかつていれば本来  
諦めるのだろう、ただ諦めるという選択指がない俺は——

——やはり壊れているのだろう。

「で二人は気絶か、少々あふぎけが過ぎたな」

「やつぱり、こうなった」

「はい、すいませんでした。じゃ、記憶を直接はダメか。《加速十対象指定・空間 倍率 ×1500万》とりあえずオーディナル・スケールを起動してくれ、動画を入れたいから見といてくれ、で、本題2。聞き流してくれて構わない、今は何もできないからな」

だから、だから失くすわけにはいかないんだ！！！！

「——さてとりあえず、エヒトは糞。」

ニツコリと笑顔で宣言する

「まあ動画を見てればわかるだろうけど、エヒトは真の糞野郎だ、この世界の人間を物に見るくらいだからな、平和などあいつがいたら成り立たない。だから潰す、あいつは潰す」

みんなあれなんかいつもと雰囲気違くない？と思ってる

神威は一瞬ビクンと震えて倒れた、と思ったら髪の色が白から濁ったような灰色に変わり、目の色は赤紫と青紫から朱色に変わった、少し顔も変わったが誤差のレベルなので無視することとする。

「まったく、しょうがない、少し、長くなるが最初から説明するか、どうせ動画にはいれてないだろうし」

そこから始まったのは始まりへと至るゼロの物語。

はい、ということでも一時休載しすっかりありふれ無い時間旅行者は世界最強ゼロをやつていきます、でアスナとかアリスのステータスは面倒だったから省略したけどだいたいこんな感じというのをのせておきます。

結城明日菜 17歳 女 レベル1 人間↓女神

職業：閃光、星王妃

筋力：14000

体力：14000

耐性：13050

俊敏：12727

魔力：19670

魔耐：15030

技能：ソードスキル《+神聖術》《地形変動》《+意思の力》《+システム外スキル》《+

オリジナルソードスキル作成》言語理解

アリス・シンセシス・サーティワン 17歳 女 レベル1 人間

職業：光の神子、整合騎士

筋力：16500

体力：16500

耐性：13050

俊敏：12200

魔力：19670

魔耐：15030

技能：ソードスキル《+神聖術》《+記憶完全支配術・記憶開放術》《+意思の力》言  
語理解

紺野木綿季 17歳 レベル1 人間

職業：絶剣

筋力：15000

体力：16500

耐性：13050

俊敏：14200

魔力：13500

魔耐：15030

技能：ソードスキル《+神聖術》《+記憶完全支配術・記憶開放術》《+意思の力》《+システム外スキル》《+オリジナルソードスキル》言語理解

ユージオ 17歳 男 レベル1 人間

職業：整合騎士

筋力：16500

体力	：16500
耐性	：13050
俊敏	：16670
魔力	：19670
魔耐	：15030

技能：ソードスキル 《+神聖術》 《+記憶完全支配術・記憶開放術》 《+意思の力》 《+システム外スキル》 《+オリジナルソードスキル》 言語理解

こんな感じかな、